　イエズス会霊性センター「せせらぎ」霊性シンポジウム

「現代に求められる黙想」―イエズス会の霊性、カルメル会の霊性からー

2021.4.17-18

**『祈りの道』の同伴者としてー霊的生活を深める「教育」**

**―十字架の聖ヨハネの『暗夜』に学ぶ**

　片山はるひ（ノートルダム・ド・ヴィ）

1. **教皇フランシスコの教えにおけるカルメルの霊性**

・『回勅　ラウダート・シ』

　230 リジューの聖テレジアは、愛の小さき道を実践すること、また優しいことばをかけ、ほほえみ、平和と友情を示すささやかな行いのあらゆる機会を逃さないようにと、わたしたちを招いています。総合的なエコロジーはまた、暴力や搾取や利己主義の論理と決別する、日常の飾らない言動によってもできています。

　234　十字架の聖ヨハネは、この世界の実在や経験の中におけるよさはすべて「神において卓絶した様式で無限に見出される、というより、むしろ、これらの優秀性のおのおのは神であるといったほうがよいだろう」と教えました

・『使徒的勧告　喜びに喜べー現代世界における聖性』

特に「たえざる祈り」147−148における十字架の聖ヨハネとアビラの聖テレサの引用。

148　「それが現実だろうと、想像だろうと、その中間であろうと、自分の働きがゆるすかぎり、つねに神の現存にとどまる努力をすることです。」

　「絶えず念祷のうちにとどまり、肉体的な仕事の間にも念祷を捨ててはいけない。食べるにしても、飲むにしても語るにしても、あるいは世俗の人々と交渉するにしても、また何かほかのことをするにしても、たえず神を望み神のほうにあなたの心の愛情をむかわせるべきである」

・『私は神をみたい（Je veus voir Dieu）』カルメルの霊性の集大成といわれる古典。

この著作を教皇フランシスコは、2017年のクリスマスに200部購入し、バチカン省庁の長官らにすべてプレゼントした。

P.Marie-Eugène de l'Enfant-Jésus ocd,　　*Je veux voir Dieu*, Editions du Carmel,1979

(英訳　*I want to see God, I am a daughter of the Church, -A practical Synthesis of Carmelite Spirituality* , P. P.Marie-Eugène de l'Enfant-Jésus ocd, Christian Classics, Inc, 1986)

(邦訳部分訳、幼きイエスのマリー・エウジェヌ師『わたしたちの念祷』ドン・ボスコ社、現在は「いつくしみセンター」が出版している。)

・Wilfried Stinissen,*La nuit comme le jour illumine*, Editions du moustier, 1990

(ウィルフリーﾄ・スティニッセン『十字架の聖ヨハネによる暗夜について』、福岡カルメル会私訳)

1. **十字架の聖ヨハネの生涯**

カルメル会改革の祖。教会博士。スペインの国民的詩人。

　1542年　スペイン、フォンティベロスの貧しい家庭にて、フォアン・デ・イエペス誕生

　1545年　父と兄の死。はたらきながらイエズス会の学校で学ぶ。

　1563年　メディナ・デル・カンポの緩和カルメル会へ入会。

　修道名：聖マティアのヨハネ。

　1568年　アビラの聖テレサとの出会いに導かれ、改革カルメル会に入り、

　修道名　十字架の聖ヨハネとなる。

　1577年　緩和派と改革派の闘争が起こり、トレドの修道院の牢獄へ幽閉される。

　1578年　奇跡的脱出の末、解放される。『カルメル山登攀』、『暗夜』執筆。この後、

　改革カルメルの重責を歴任。

　1584年　『霊の賛歌』の注解を執筆。『愛の生ける炎』執筆。

　1591年　ウベダにて死去。

　1675年　クレメンス十世により、列福。

　1726年　ベネディクト十三世により、列聖。

　1926年　ピオ十一世により、教会博士と宣言される。

1. **『暗夜』(Noche Oscura)**

・「夜（Noche）」についての教えは主として、『カルメル山登攀』(Subida del Monte Carmelo)と『暗夜』にある。『登攀』序文の執筆動機にあるように、この霊性の書は実は優れた実用書であり、霊的生活の難所を導くためのガイドとなる。

1．暗き夜に、炎と燃える、愛の心のたえがたく、

　おお恵まれし、その時よ　気づかるることもなく、出づ

　すでに、わが家は、静まりたれば

　2，闇にまぎれて　恐れなく　それとは見えぬ姿にて、

　隠れし梯子をのぼりゆき　おお恵まれし　その時よ

　暗闇に身をば　かくして　すでにわが家は　静まりたれば

　3．恵まれし　その夜に　気づかるるなく　しのびゆく

　目にふるる　ものとてもなく　導く光は　ただひとつ

　心に燃ゆる　そが光

・「じっさい、人々は徳のみちを歩み始めても、主がかれらを神との一致にまで到達させるために、この「暗夜」の中にお置きになろうとすると、もう足踏みをしてしまうのである。というのは、そこに自分自身入りたくないと思うか、または、そこに導き入れられることを望まないため、また、あるときは、そんな時の自分自身の状態がよくわからず、それに頂きまで導いてくれる、聡く適切な案内者をもたないためである。」（『カルメル山登攀』まえがき、25頁）

・**「夜」とは神へと向かう人間の霊的歩み、その過程を指す。**

・神との一致への道全体が「夜」と呼ばれている。また「夜」とは、神との一致、すなわち聖性へとたどり着くために、人間が通らなければならない浄化と剥奪をも指す。神との一致を妨げるのは、富への執着と欲望。

**この過程を「夜」と呼ぶ三つの理由（『カルメル山登攀』33頁）**

1）霊魂が出て行く出発点。この世のすべてのものに対する欲望を断ち、それを退けなければならないため、このような剥奪や欠如は人間のすべての感覚にとって「夜」であるため。

　2）神と一致するために通り過ぎる手段ないし「道」、これは信仰であり、信仰は理性にとって、夜のように暗いため。

　3）神という至りつくべき「終局点」からみて、神は、この世にとって、「暗夜」である。

　・「夜」は手段であり、めざす所は、神ご自身すなわち愛そのものである。

・無の博士、夜の博士と呼ばれるが、十字架の聖ヨハネは何ものにもまして愛の博士。

## ４）感覚の「暗夜」

①「感覚」（el sensido）は、いわゆる五感のみを指すのではない、五感を含むが、同時に想像力記憶、悟性などの感覚と直結する精神的能力をも含む。

②「霊」（el espiritu）とは、より内的領域、すなわち根源的意志、と直観的知性の場を指す。

・「感覚」とは、外界から影響を受けやすい騒音や動揺の領域であり、「霊」は、神の住まい、すなわち平和と沈黙の領域。

・そして、その深奥に聖霊の住まわれる「魂の中心」があり、それによって人間は神の似姿である。これがヨハネが描き出す内的世界の見取り図。

・この区分けは、概念的なものではなく、彼の様々な霊的体験により与えられたもの。

・**「感覚の暗夜」**　は、ごく普通のもので、初心者の誰にもおこる。

・**「霊の暗夜」**の方は、非常に稀で、修練を積んだ進歩者のためのもの、霊を神との愛の一致すなわち聖性へと準備するもの。

**このそれぞれの「暗夜」に「能動的暗夜」と「受動的暗夜」の区別がある**。

・**「能動的」**とは、人間の側からの抑制の努力を意味し、**「受動的」**は神からの働きかけを意味する。

・「能動的暗夜」が必要不可欠であるのは、受動的「暗夜」を神からうけるための、準備に過ぎないからである。

　神へと向かう人間の信仰の歩みは、「感覚の暗夜」を通らなければならない。

・子育てのイメージ: すなわち、信仰において初心者の頃は、人は幼子が親に甘やかされて育つように、神の中に、多くの味わい、慰め、支えを見出して、満足し、喜ぶ。ところが、少し大人になりはじめると乳離れが必要となる。つまり「感覚的」な喜びや味わいゆえに神を求めるのではなく、神が神である故に神を求めるという大人の信仰へと成長しなければならない。それゆえ神はこの甘やかされた初心者を「感覚の暗夜」へと導かれる。

**５）「感覚の暗夜」を識別するための3つのしるし**

霊的成長の一段階であるこの初めの「暗夜」を、単なる生ぬるさや怠惰あるいは、メランコリーなどと混同しないためのしるし。（『カルメル山登攀』の第2部13章）

・第一のしるし、神に関することのうちに、何の味わいも慰めも見出さないこと。いわゆる無味乾燥。イエズス会の霊性では「荒み」と表現される状態。

・第二のしるしが同時に必要。無味乾燥の中でも、気遣いと心配に心を痛めながら、神のことを思い出すということ。この点がなければ、単なる不熱心や生ぬるさである可能性がある。

・第三のしるし、努力しても、想像という感覚を使って黙想することも、推理することもできないこと。別の言葉で言えば、今までの祈りの仕方ではもう祈れなくなり、自らの能動的努力は無力となるという状態。神からの純粋な恵みである観想（contemplation）の初めとなる。

**６）「感覚の暗夜」の効果**

　こうして、人は、自分の弱さ、限界、惨めさを感じることにより謙遜となり、隣人愛を深め、より深い自己認識をもって傲慢の誘惑から逃れて、信仰においての大人としての歩みをすすめてゆくことができるようになる。

これが、「感覚の暗夜」において行われる浄化。ゆえに、信仰者の誰にでもおこるものであり、この「暗夜」を通らなければ、いつまでも幼児の状態に留まり、大人としての信仰を得ることができない。それゆえ、「暗夜」の詩において、これが、　「おお、恵まれし、その時よ」と歌われている。

**７）比喩による説明**

1. 太陽と目のたとえ

　「霊魂は、神に近づけば近づくほど　ますます闇の暗さを感じ、自分の弱さの故に、ますます深い闇を感じる。それはちょうど、ある人が太陽に近づけば近づくほど、その人の目の弱さと不純さの故に、太陽の偉大な輝きが、その人にますます深い闇と苦痛とを引き起こすのに似ている。これと同じように、神の霊的光は、非常に壮大であり、人間の自然的理性をはるかに超えるものであるため、それに近づけば近づくほど、その人を盲目にし、暗くする。」[[1]](#footnote-1)

目はわれわれの理性であり、理性に接ぎ木された信仰。真夏の太陽を裸眼で直視することは決してできないように、わたしたちの理性では、神をとらえることはできない。神はわれわれの有限の知性を遙かに超えた存在。信仰をもって神に近づけば近づくほど、近くなっているにも関わらず、目には闇しか感じられなくなる。これが、この浄化のメカニズム。神に近づいているにもかかわらず、理性には、その逆の印象しか感じられないというパラドックスが生ずる。

1. **火と薪のたとえ**

火は神であり、薪は人間。

「神的な光は、霊魂を自分と完全に一致させるために、霊魂を浄め、整えながら、ちょうど火が薪を自分に変化させようとして薪に働きかけるのと同じやり方で霊魂に働きかける。（…）

　物質的な火が、薪に働きかけて　まず第一に始めることは、それを乾燥させることであり、湿気を外に追い出し、薪が含んでいる水分を絞り出してしまうことである。それからまもなく薪をこがし、真っ黒にし、醜くし、悪臭を放つことさえさせる。そして、（…）暗く醜い偶有性のものをすべて引き出し、追い払う。そして遂には、外側からそれを燃え立たせはじめ、熱くして、それを自分に変化させ、火のもののように非常に美しくする。」(『暗夜』、188-189頁)

**８）日常生活の中の暗夜**

　「霊の暗夜、浄化は、実験室で行われる実験や、クリニックで行われる手術のようなものではない」。（*Je veux voir Dieu*, op.cit., p.818. *La nuit comme le jour illumine*, op.cit., pp.32−35．）

「暗夜」、すなわち神の働きは、生活のもっとも日常的な事柄、特に人間関係の難しさ、病気、離別、などのネガティブな事柄の内に隠れている。神の働きは、生活全てに及び、そこでふりかかってくる様々な試練によって、我々は清められ、信仰を深められてゆく。　別の言葉でいうならば、すべては神のうちに存在しているがゆえに、どんな苦しみも決して無駄ではない。

　　「霊の暗夜」とは、抽象的な概念ではなく、それは生々しい人間的体験。十字架の聖ヨハネ自身の場合も、「霊の暗夜」は、彼が同じ会の修道士達にトレドの牢獄に幽閉され過酷な状況を生きざるを得なかった時のこと。

→教皇フランシスコのコルドバでの体験、教皇フランシスコにとっての「霊の暗夜」

（オースティン・アイボリー『教皇フランシスコーキリストとともに燃えて』明石書房、

315-320頁）

　苦しみがきよめの「暗夜」となるための条件は、それを受け入れること。

なぜなら「暗夜」とは、神の罰ではなく、恵みである。

苦しみが「暗夜」となるかどうかは、それを受け止める自分次第。すなわち苦しみに対して苦い思いと反抗に終始するのか、または暗夜として受け止め、そこで神と出会うのか。

　大切なのは、われわれの人生に何が起こったかではなく、われわれがその起こったことをいかに受け入れ、生きたかいうこと、そして神の恵みの働きにどのように身を委ねたのかということ。その時、わたしたちの心の傷は、わたしたちの心の扉となり、その心の傷口から神の恵みが入ってきて、少しずつ、私たちを「古い人」から「新しい人」へと変えていってくれる。

**参考資料**

**「霊的荒み」について　（『霊操』門脇佳吉訳、岩波文庫、263〜268頁）**

**・第４則　霊的荒みについて**。第三則の慰めとは正反対の動きを荒みと言う。例えば、魂の暗闇と魂の中に起こる混乱、卑しい地上的なものへ引きつける動き、種々の扇動や誘惑から生ずる不安などがそれである。そして希望なく愛なく、不信へと動かし、すべてが億劫で熱意なく、うら悲しい心境になり、**創造主から全く見離されたかのようになる**。

・**第９則　（荒みの原因）**

1. われわれが霊的務めに生温く、熱意なく、不忠実であるからである。このようにわれわれの過失のために霊的慰めがわれわれ自身から離れ去って行くのである。
2. われわれがどのような人間であるかを明らかにするために、神がわれわれを試みるためである。慰めやあふれるばかりの恩寵の、豊かな報いがなくとも、われわれがどれだけ神への奉仕と賛美のために献身しつづけることが出来るかを試すためである。
3. 神が真の洞察と悟りをわれわれに与えるためである。いや増す信心、熱烈な愛、涙、他の霊的慰めを得たり、それを保持しているのは、われわれによるのではなく、すべてわれわれの主なる神の賜物と恩寵にほかならないことを内的に感得するためである。高慢や虚栄の念を起こしながら、信心やその他の霊的慰めを自分の努力の結果であると思い込みながら、他人の家の軒下に自分の巣をつくることのないためである。

**・第１１則**

慰められている人は、今のような恩寵と慰めのない荒みの時に、自分がいかに無力であるかを考え、できるだけ自分をへりくだらせ、身を低くするよう務めるのである。これとは反対に、荒みのうちにある人は、創造主なる主のうちに力を得ることによって、すべての敵に抵抗するために充分な恩寵を与えられ、多くの事をすることができることを考えるのである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　ノートルダム・ド・ヴィ

<http://www.ndv-jp.org/>

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

1. 同書、p.238. [↑](#footnote-ref-1)